

難民雇用支援でネイルサロンがオープン 「カッコいい難民目指したい」

東京港区にある天王洲

シヨールーム。5月、この一角でネイルサロン「アルーシャ」がオープンした。3人のネイリストは全員難民だ。同サロン代表者の岩瀬香奈子さんが、昨年、難民支援者

と知り合ったことがきっかけで誕生したサロンである。日本に暮らす難民の雇用支援を目的にスタートした。

ミャンマー国籍のナンユンさんは1992年、当時母国で民主化運動に参加していたが、仲間が次々に逮捕されていくうちに国にいられなくなつて、脱出を決めた。キリスト教徒が99%を占める」というカチン族の出身であり、バプテスト派の信徒だ。カチン族は北

部の中国・雲南省と国境

を接するカチン州の主要民族。「日本は」ミャンマーよりは平和だけど、生活は大変だ」と笑う。

諸外国から「難民鎮圧」と批判されている日本だが、ナンユンさんは「20世紀のアジア」について書かれた本で「日本は民主化されていて、犯罪が少なく、世界では1、2になるくらい平和な国」という情報を手がかりに決断した。

地元で有名な父は親は民族独立運動の最中、国軍に殺害された。ナンユンさんは13人兄弟。うち4人はすでに死んでいる。兄弟と何年か一度会うこともあるが、待ち合わせ場所は雲南省と言う。

ナンユンさんは主に在

京のミャンマー人を対象にした「東京カチン・バプテストチャーチ」に通う。少なくとも月に3回は聖書を読み、現在は日本語の礼拝にも出席している。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」(マタイ6・33)。

この聖句がナンユンさんの心を支えてきた。「12歳のとき、牧師が教えてくれた特別な聖句。そのときは意味がわからなかったが、日本に来て辛い目に遭ったり困難なことに直面すると、この言葉が胸に響いてくる」

いかなる宗教よりも上座仏教が奨励されるミャンマーでは、カチン州などキリスト教徒の多いエリアでも、建造物の外観にそれとわかるようなアイテムを施すことは禁止されている。学校では仏教の祈禱が強制されるので、キリスト教徒の子供がいじめに遭うケースも多い。

「こと」と胸を張る彼女にとって、ネイリストの仕事は「天職」といえる。日本に来て、自分は全然予期していなかった人生を送っていると感じ、岩瀬さんと出会った。ネイリストになるため、「毎日5時間、3週間行われる研修に休みなく参加できること」という条件をクリアし、開店と同時にプロデビューを果たした。

ミャンマーでは美容師だったナンユンさん。趣味は「人をキレイにする」



ミャンマー国籍のナンユンさん

技術を磨くため、今も練習に余念がない。

グローバル化で国と国との距離は一層縮まった。しかしその分、難民の視点から母国を見つめると「軍政権が発達するにつれ、どんどん孤立を深めていく。このまま世界から忘れ去られていくんじゃないか」と表情が硬い。ミャンマー国内のテレビは「軍に関するもの」が大半を占め、ラプストリー仕立てのドラマや映画でも、「軍人」のことが入っていないと放映できないと言う。

「難民と言うとたいいていの日本人は見下してくるように思う。前の職場(居酒屋)でもそう感じた。人間だからそう思う人がいるのは仕方ないけど、やっぱり悔しい。自分の国で食べていけない、ではなくて、暮らして行けないという状況だから日本に来たわけだ。プライドはある」

すでに人生の半分は日本で過ごした。

「本当は、わたしは難民です、なんて言いたくない。難民だから、と支援を受けて生きるのではなくて、どこに行っても食べてゆけるように腕を磨きたい。目指すはカッコいい難民です」

※アルーシャ 13時〜21時。予約制。☎03・6721・80028(水、日、祝日休業)